［発掘余話］金沢城跡五十間長屋出土の「鍬始」刻石

その３～おそるべしジンザ～

北野博司

18　朱書き石の発見

石垣解体調査は師走に入り時雨の中も急ピッチで作業が進められた。解体する石材は、取り外しの現場で一石一石、詰め石や合場の状態など積みの特徴を記録し、写真撮影を行う。石の加工痕跡は、二ノ丸広場の仮置き場で記録を取るが、一度置いてしまうと裏面が観察できなくなるため、危険をともなうが釣り上げたわずかの静止時間が勝負のときである（土田友信「金沢城跡石垣調査と刻印」『石川県埋蔵文化財情報』第2号）。

「石積み技術」を復元する唯一の実物資料である「石材の諸関係」は、一旦解体すると永久に失われてしまう。足場の悪い栗石の上で、これを見逃すまいとする緊張感と、作業をすばやく進めようとする「石工(敬意を込めてそう呼ばせていただく)」との対決を繰り返すなかで、夕方には一日の疲れがいいようもなく足下から襲ってくるのであった。これだけの緊張感が続くとさすがに夢にみる調査員がでてきた。事件はそんな疲労感がたまってきたころに起こるものである。

夜、写真を整理していて、調査員が叫んだ「なんや、これ!!」。みんながまわりに集まった。直方体状のかつら石（天端石）の裏側に赤色の文字が見える。「三十」なんとか。最後の文字は読めない。早速翌日、業者に頼んで石を裏返してもらうと、やや鈍い赤で「三十七」と書いてある。写真で見えるような文字を現場で見落としていたのだ。朱書き石は、工事の際の石工達の符丁であるという。当時の工事形態を知る上で貴重な資料となる。翌日からさらに集中力を高める必要が出てきた。

現場は正月休みがあけると大雪に見舞われていた。冬場も石垣解体調査を継続するということで五十間長屋から橋爪門続櫓を覆う大きな素屋根をかける工事を始めた矢先であった。幸い覆い屋が完成する１月25日まではこの緊張感から開放されることとなったが、その間は二ノ丸広場で雪をかき分けての石の加工痕観察が待っていた。

春はまだ遠い。

19　「鍬始」石はジンザの仕業か？

宝暦年中にジンザが城内で盛大な鍬初めを行ったという記録を糸口として、犯人探しが始まった。ジンザのプロフィールを簡単に紹介しよう。

もとは御扶持人石切で絵図が得意であった。宝暦五年（1755）「御絵図書」となり、宝暦九年大火の「御焼失絵図」を調えた。宝暦十一年に穴生に出世し、その後、明和・安永年間（～1780）まで活躍している。天明年間に五十歳余りで亡くなった。家族構成や家柄等は次号以降に触れていく。

さて、五十間長屋石垣が修理された宝暦十三年（1763）当時、世襲穴生の後藤家、奥家とも世代交代の時期で担当となるべき当主がいなかったことは前号で紹介したが、他にもジンザが関わった状況証拠がある。

正木甚左衛門は当時、石引きの画期的道具である「地車」の発明者として知られており（ただし、彦三郎によれば真の考案者はジンザでなく御手木小頭関口喜太夫ら４人だという）、宝暦十二年（1762）四月に初めてこれを使って、貯用石のあった中山町から城内へ石引きをした。

より直接的な関連を示す記事として、大火後の五十間長屋台の石垣普請の際、正木甚左衛門が工夫して石垣の上にあった塀を引き除け、積み直しが完成してから元の通り引き据えたという。発明者ジ

ンザの本領発揮である。

さらにおもしろい話がある。城内の石垣の善悪について寸評を加える後藤彦三郎は、金沢城で二番目に見事として、二ノ丸の菱櫓下～楽屋多門下石垣をあげている。実はこの石垣、寛文六年に崩れ、寛文八年(1668)に後藤家三代権兵衛（彦三郎は六代目）が修築した部分である。この菱櫓東北隅と宝暦年間に積み直しをした五十間長屋東北隅とは対になるもので、本来勾配（矩方・規合）が合致すべきところをおもしろくないこと（第４図）になってしまった。これは穴生が「石法」を知らないからであるという。図で重ね合わせると僅かなことのように思えるが、現場で見るとそのちがいは歴然としている。菱櫓下を手本にして複雑な勾配理論を完成させた彦三郎がこれを許せなかったのもうなづけるような気がする。この「石法を知らない」の批判文句は別の箇所でジンザに対して向けられている。

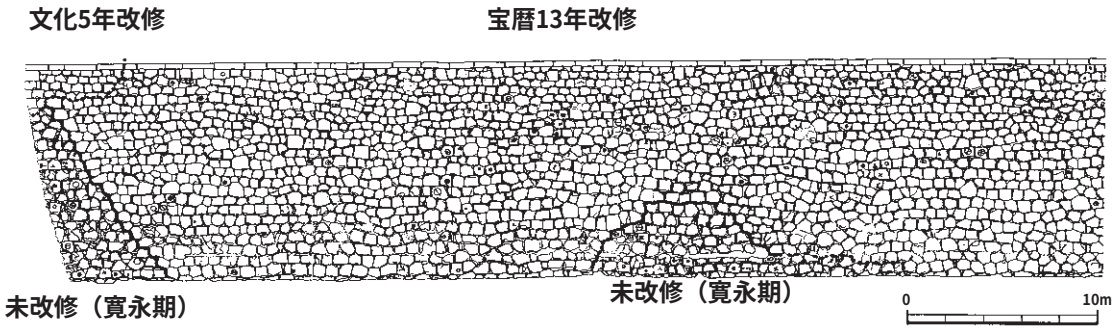
20　石垣は語る－ジンザ積み－

これだけ状況証拠がそろった。刑事ドラマならさしずめここで物証を探しあて、立件へと進むのであろうが、なんせ250年前の出来事、ジンザが関わった物証はそう簡単に出てこない。

考古学は「モノ」を観察、記録し、そのデータを考古学独自の方法論や関連分野の学問方法を援用して、歴史を復元していく。しかし、資料の性格上個人名がわかることはまずない。文献史料等を援用して考古学的事実（観察した記録）をいかに説得力のある仮説に組み立てるかが勝負である。

さて、五十間長屋台石垣の特徴を整理しておこう。内堀側は割石を積んだ「打ち込みハギ」、二の丸側は方形、多角形に加工した切石を積んだ「切り込みハギ」という方法で積まれている。これは菱櫓から橋爪門続櫓が寛永期に創建されてから、江戸時代を通して変わらない。この間、場所を変えながら４回の修復工事(1)が行われたことが今回の調査で明らかとなった。宝暦十三年のの２回目の修理は、五十間長屋の直線部分全体の範囲にわたる（前号参照）。今回の解体調査の成果のひとつは、同じ「打ち込みハギ」「切り込みハギ」でも各段階によって石積み技法や石の加工技法が異なることが明らかとなった点である。その要因には時代性と穴生の個性の両面があろう。細かい話は別にして仮称「ジンザ積み」の特徴をいくつかあげておきたい。

解体当初、このあたりの石垣は石材の控えが２尺前後と短いことや石垣の悪い積み方として知られる「谷積み」が目立つこと、現場でその都度石に再加工しながら積んでいることなどから、我々の技術的評価は低かった。しかし、５～６段はずしてからはやや様相が変わってきた。石材は３尺前後となり、とびとびに６尺の大石をはさんでいく(2)のである。下段に行くほど石材は大きめとなり布積みも揃ってきた。「半鶴半伐合積」と呼ばれるごとく割石の周囲をうまく切り合わせながら積んでいる。石垣石の後ろにはその安定のために丹念に大きな川原石（捨て石）を配している。続櫓との修築の境目、斜めの線に沿って６尺大石を連続的に並べているのもこの部分が一番弱点であるのを知ってのこ



第１図　五十間長屋　内堀側石垣立面図

とであろう。上部の石材が小型で再加工が多いのは、計画天端高に合わせるための調整だったのである。

切り込みハギでは斜めに切り合わせる「乱伐合積」（亀甲崩し積）を用い、切石の周囲を幅１～２cmで縁取りするような調整を行っている。これは切石製作上の過程で生じる技法痕跡であるが、デザインとしてそれを残した。宝暦以降一般化していく技法である。寛文年間の後藤権兵衛や文化年間の彦三郎が切石積みのすき間に盛んに用いたクサビやカスガイをジンザは使わなかった。錆びる金物を使う事への抵抗があったのかもしれない。かわって、彦三郎の専売特許のようにみていた「小からす石（黒くて硬い川原石をうすく割った詰め石）」をジンザはすでに使用している。

五十間長屋の調査が始まってすぐ、石垣台の内部が土で充填されているのが分かった。本来栗石であるはずなのに。本誌創刊号の「宝暦十三年定銀御達始且御押之留」にあるように、起工（鍬始石にある６月25日）直後の８月に御年寄衆から工事費を半分に減らすように御達しがあった。きっとジンザが手抜き工事をしたのではなかったかと冷ややかな見方をしていたのである。しかし、逆に言えばそれでも十分であったのだ。加賀藩の厳しい財政状況を知り、持ち前の工夫、創造力を最大限に発揮して復興事業をやり遂げたのである。

見通しは見事に裏切られた。おそるべしジンザ!!

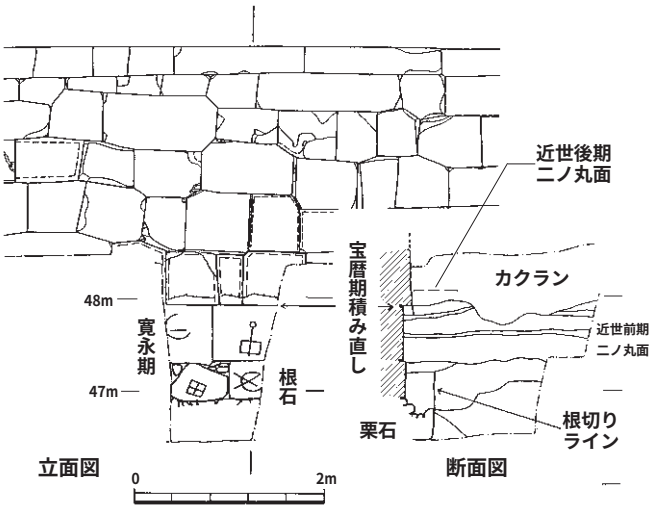
ここでは触れないが、当然「ヒコザ(3)積み」「ゴンベエ積み」もあるのである。石積み技法は担当穴生の個性もあるが、それとて時代性とは無関係ではあり得なかった。これらの関係を読み解くのが今後の課題であろう。

21　試掘での早とちり

実はジンザにもう一つ謝っておかなければならないことがある。五十間長屋台の二ノ丸側の根石を確認するために試掘をした際、天端石から５石目まで掘ったところ、そこで石垣石が途切れており、その下は礫混じりの土があるのみであった。通常、根石の下には加重に耐え石垣が安定するよう栗石を敷くなどするのではないか。高さ２m足らずの石垣とはいえ、こんな基礎構造の手抜きはないと思った。実際、寛永期ないしは寛文期とみられる菱櫓よりの根石のまわりはしっかりと栗石が詰め込まれている。

その後、解体調査の進行にともない基礎地盤の支持力を試験するためにこの付近で本格的な根石調査をする機会があった。試掘時の記憶が頭にあったせいか、この時も５石目の下に土があるのを確認して根石と判断した。ジンザが宝暦の改修の時に法面安定のために二ノ丸側を大きく崩して施工したためと解釈した。穴生の掟では、折れるなどしないかぎり根石はできるだけ動かさないものである。掟破りのジンザか。

そして、この根石をはずす日が来た。「ハサミ」と呼ばれる道具で石を釣り上げ、周囲の目が根石の下の地盤に集まった。一同は「あっ！」と言ったきり言葉を失った。なんと下にはしっかりともう一段石垣石が



第２図　五十間長屋二ノ丸側根石確認調査

顔を覗かせている。５段目が10㎝ほど前へずれていたのである（第２図）。結局、石はさらにもう一段あり、「根切り溝」の中にしっかり栗石を詰め根石を置いていることが分かった。この部分は創建の寛永期もので、ジンザも根石はさわらずに修築工事をしたことが判明したのである。

石が前へ飛び出していたのは、後世の孕みではなく、ジンザが修築した時には、五十間長屋台西辺の石積みラインが宝暦以前の不同沈下等によって凸凹が生じていたのである。ジンザはこれを一直線に直したため、あるところでは後ろへ引き、あるところでは前へ出して積むことになったのである。不幸にも試掘が、石が前へ飛び出した箇所にあたったことが判断ミスのはじまりであった。

22　人間ジンザ

ジンザの人柄を窺わせるいくつかのエピソードを紹介しておきたい。

（１）戸室石心得違い事件

ジンザは、「山から掘り出した石はそのまま積むと表面が軟らかくてよくない。風雨にさらしておいて石は硬くなるのだ」という。彦三郎は「それは心得違いで、そんなことを言っていたら新石はすべて役に立たないと言っているようなものだ」と非難する。

能登半島の海岸部には古墳時代の横穴式石室墳がある。砂岩質の岩層が海に転落したものを石室用材としているが、一定期間海にあったことを示す穿孔貝が付着した石材を優先的に用いている。崖に見える石は表面が軟らかくて使わないのである。これは岩石種と風化度の問題であろうが、両者の言っていることは両方ともあたっていると思う。ジンザの言っていることの方が職人的かもしれない。

（２）辰巳櫓台塀引きすえ事件

ジンザは宝暦十三年に五十間長屋台修築で石垣上にあった塀を一旦引き、石垣完成後、見事元に戻した。この技を発揮する時がまた巡ってきた。時は安永元年（1772）、本丸東南の辰巳櫓の石垣台修理にあたり、ジンザが例によって塀を引き除けた。すばやく石垣を完成させ、塀を引きすえる時が来た。ところが今度はうまくいかなかった。設計と寸法が違ってしまって、塀を乗せようとしたが長短ができて引きすえられなくなった。さあどうするか。こんな場合、本来は石垣方が再度積み直すところであるが、この時は作事方の棟梁が出てきて塀を直すことで事なきを得た。この櫓台修理は甚だ不出来で、いわゆる剣先石垣になってしまった。櫓台の場合は特に縄張りをしっかりして、勾配等の設計図も作ってやるべきなのに、ジンザにはそんな気配もなかった。現場担当の御扶持人石切浅野四郎兵衛はこの一件を苦に病死してしまった。

石垣の上の塀を引くのは職制上、本来は作事方の仕事であった。宝暦十三年の普請を契機にどうも石垣方に移っていったようである。また、工事現場で仮設する作業用の「桟橋」「足代」「仮小屋」「仮垣」も本来は作事方の担当であったが、宝暦大火後、石垣方に移っていった。ジンザの積極性が作事所の仕事を取ることになったのか、別の力関係で石垣方がやらざるを得なくなったのかどちらが実態だろうか。安永六年、普請奉行が御年寄にあてた文書の中で、安永元年の辰巳櫓の際は「格別の趣をもって穴生の担当とした」とあるので、前者の可能性が強い。なお、安永六年の辰巳櫓下石垣普請の際には作事所が材木入用の間にいとも簡単に引き除けたとあるので、一気に石垣方に転換したわけでもなさそうである。

（３）辰巳用水御居間先事件

明和年間（1764～1771）、辰巳用水を二ノ丸御殿の御居間先にあげる工事が甚左衛門に仰せつれられた。ジンザは工夫してやったが巧くいかなかった。結局、作事所に引き渡すことになり、残らず取り壊し、作り直して水上がりがよくなった。この水上げは非常に距離が長く、作事所がやっても難しか

ったという。御扶持人石切等はひどいことであったとぼやいていた。彦三郎は言う。「他の役所の仕事でも仰せ渡されれば是非もなく勤めるべきであるが、こちらから進んで申し出するのはよくない。」

ジンザが出しゃばったのか、コネを使ったのかは分からないが、他の役所の仕事までやるような活躍ぶりを窺わせている。

（4）新坂柵門事件

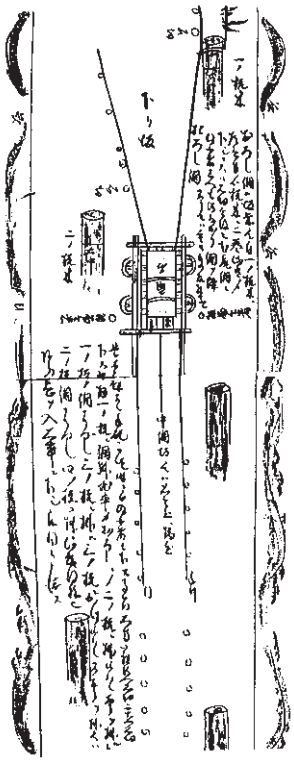
ジンザが指揮した安永年間の石引きは地車に5石（数トン）も乗せていた。人足は余りのつらさに日雇賃も取らずに帰るものもいたくらいである。その上、夜10時を過ぎても翌朝に繰り越さず、石川橋の先にあった新坂柵門を入ろうとしたが、奉行衆に差し止められた。また、炎天下の石引きでも根気強く引き、夜8時までやって翌朝一番にその場所に現れる。ジンザの仕事熱心さ、強引さがうかがえる。石垣御用に身骨を損じたジンザの仕事ぶりである。

（5）大地車ひっくり返し事件

安永八年(1779)、戸室山から本丸シノギ角用の大角石（6トン弱ぐらい）を引くのにジンザは大型地車を使ったが、車運びが悪く城内まで10日もかかってしまった。途中、浅野川にかかる田上橋の牛坂（野坂）付近へ来たところ、町中より手伝いの人がたくさん出て余りの大人数で引いたため田んぼの中へ角石ごとひっくり返してしまった。小地車は便利な道具であるが、大地車は慣れないと使うのが難しいのに、と彦三郎は言う。ようやく城にたどり着いた日、ジンザは祝いにみんなを家へ招待したが誰一人来なかった。

彦三郎にとっては痛快なできごとであった。時に彦三郎和睦24歳。前年、後藤家に婿養子として入り、石垣普請並びに戸室山石切出等見習になったばかり。養父用助に晴れがましい仕事がこない中、彦三郎はどんな思いでジンザの活躍ぶりを見聞きしていたのであろうか。

さらに彦三郎は言う。甚左衛門は石垣を築くことは知らないが、ほかのことは「きつい者」で、36貫（135kg）の力がある。世に名を知らない者はいない。御扶持人石切からのたたきあげであるジンザが屈強の体格の持ち主であったことを窺わせている。炎天下や夜中までの石引き、形式にとらわれない仕事ぶり、彦三郎がジンザを称して語った言葉の数々「発明者」「巧者」「誉者」「器量の者」「元気者」「根気強い」「只者でない」「夫図り（人夫の見積）が非道」「虚を実に仕成す」「先ず奉行と取組」。彦三郎が残してくれた記録を通して、人間ー正木甚左衛門が浮かび上がってくる。考古学はモノを通して歴史を復元する学問であるが、こんな人間味のある味付けがあるとまた歴史は楽しい。



第3図　坂道での地車のおろし方
（『戸室石引道』より転載）

23　中締め

ジンザについて語るとどこまでも筆が走る。不思議な魅力を持った人物である。彼が生きた江戸中期がどんな時代かとても興味が沸いてくる。一世を風靡した正木甚左衛門は、天明五年(1785)、息子吉左衛門の不始末による正木家改易とともにやがて人の脳裏から忘却のかなたへと去っていく。人呼んでジンザ。時代を駆け抜けた忘れ得ぬ加賀藩穴生のひとりである。

本号を含めて３回、金沢城跡の発掘調査現場の様子を伝えてきた。「事件は現場で起きているんだ!!」の名セリフを引くまでもなく現場は実に生き生きとしている。その様を「情報」として発信するのを目的に「ふざけたことを」の誹りを覚悟で連載させてもらった。金沢城跡二ノ丸五十間長屋の陣はまだ年が明けたばかりである。１年余りも時差ができてしまったが、これから起こる事件はますます奇々怪々、乞うお楽しみに。

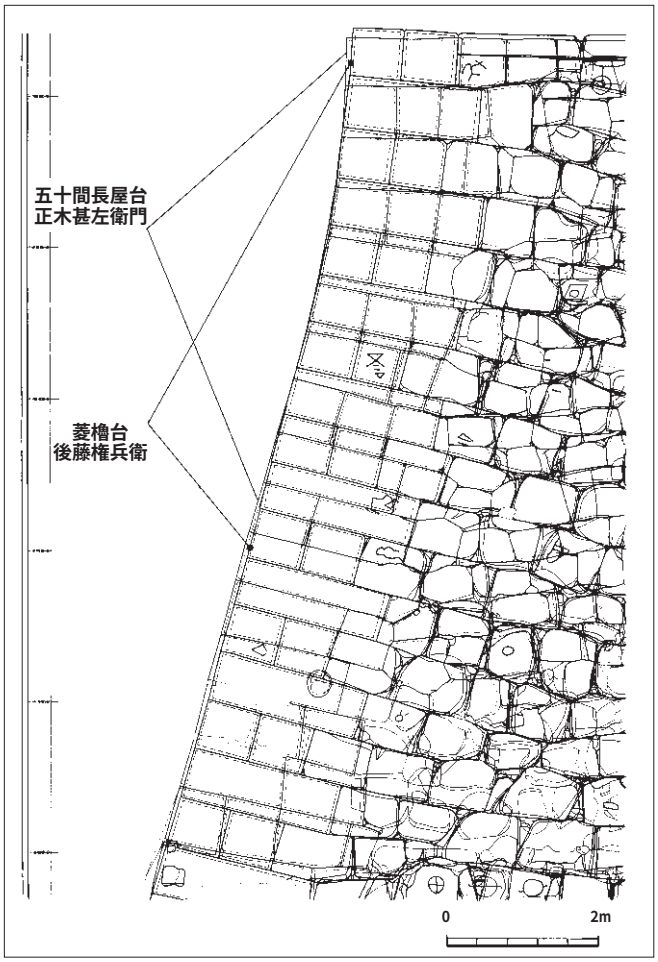
注

（１）創建寛永八年(1631)頃、寛文八年(1668)菱櫓修築、宝暦十三年(1763)五十間長屋修築、天明八年(1788)続櫓修築、文化五年(1808)続櫓修築。このうち、天明八年の修築以外は現地でその範囲等が確認できた。（本書30～33頁参照）

（２）平成8年に文化財課冨田和気夫氏がこのことを最初に指摘した。石垣は解体しなくても観察できる情報が多い。本丸下蓮池堀の石垣にも長手の大石をとびとびに配する技法が確認できる。

（３）文化五年の橋爪門続櫓修築は後藤彦三郎と嫡男小十郎（徹丞）の父子が担当した。

※お詫び　前号56頁で新丸に普請会所があったとしたのは間違いで、古くは蓮池の続きにあり、後に大手の黒梅屋橋の橋爪西方に移転した。お詫びして訂正する。



第４図　菱櫓台と五十間長屋台石垣角部の勾配合成図

写真１　朱書きが発見されたかつら石の裏面

写真２　ジンザの石積み技法を調べる